

よく、子どものしつけや教育について意見を求められます。しかし、私ももう自分の子どもたちが子育てを終わろうとしている歳ですから、IT化社会が子どもたちにもたらす影響など近年の事例には疎く、どうしても話は原則論になりがちです。そうだとしても、しつけや教育の本質は時代とともに移り変わるものではないから、基本的には、それでよいと思っています。今回は、そのしつけや教育について、私の思うところを、お話ししたいと思います。

明治のはじめ、日本の近代化を目指した知識人たちは、欧米の文化を移入するため、それまで日本語になかった欧米のさまざまな概念を翻訳しました。たとえば英語の「フリーダム」を「自由」と翻訳したのは福沢諭吉でした。

皆さんもご存じのように、英語の「エデュケーション」は「教育」と翻訳されて今日に至っています。翻訳したのは初代文部大臣の森有礼もりありのりです。「教育」とは文字通り「教える育てる」という意味です。当時はこの他にも二つの翻訳語が考案されたと伝えられます。大久保利通が訳した「教化」と、福沢諭吉が訳した「開発」です。

「教化」とは、教え導くことです。それに対して福沢が「開発」としたのは、「エデュケーション」の元となったラテン語には、内にあるものを「引き出す」という意味があるからでした。たしかに教育の本質は、一人ひとりの子どもに生まれながらに備わっている能力や可能性を最大限に引き出すことです。「教化」が上から目線であるのに対して、「開発」には、子どもの自主性を尊重する視線が感じられます。教え込むのか、自ら学ばせるのかの違いです。さて、実践倫理の教育観はいずれでしょうか。

私が常々「これこそ親であるための極意だなあ」と感じ入っている名言があります。「赤子には肌を離すな。幼児には手を離すな。子どもには眼を離すな。若者には心を離すな」という言葉です。

これは京大名誉教授で秩父神社の官司でもある藺田稔しのだみのるさんが提唱している「親の心得」です。肌と手と眼と心をキーワードとして、発達段階に応じた子どもとの接し方を見事に表現しています。

なかでも留意したいのが第三条の「子どもには眼を離すな」です。ここでいう「眼を離すな」とは、ジロジロ見ろということではないでしょう。あまり目立たぬように、しかし、一朝事いちじょうじがあったときには、すぐに手を差し伸べられるように常に見守るということです。小学生の登下校時に、地域の人たちが行っている「見守り」もこれに当たります。「見ぬふりをして見ている」見方です。子どもの自立のためには、密着しすぎず、ほどよい距離を保って接することが大切なのです。

哲学者で倫理学者でもある鷺田清一わしだきよかずさんは、著書の中で「見て見ぬふりをする」と「見ぬふりをして見る」とでは、同じように聞こえるけれど、その間には並々ならぬ温度差がある、と言っています。

言うまでもなく「見て見ぬふりをする」とは、かわりになりたくないから、見なかったことにすることです。電車の中でインネンをつけられて困っている人がいるというのに、周りの人は見て見ぬふりをし

ている、そんな場面です。それに対して、子どもたちが悪戯いたずらしたり、冒険したり、ときには喧嘩けんかをしたりするのを、大事に至らぬよう、遠目で見守っているのが「見ぬふりをして見る」態度です。昔の路地や商店街など、職住一致の生活空間では、子どもたちは「見ぬふりをして見守っている」大人たちに囲まれて「勝手に」育っていたと、鷺田さんは懐かしそうに書いています。

この「見ぬふりをする」こと、つまり、近すぎず遠すぎず、ほどよい距離を保つことが子育ての極意ではないかと思えます。それは過保護や過干渉など親の身勝手な行動を「捨てる」ことでもあります。実践倫理でいう「捨て育て」とは、そういうことです。もちろん「捨てる」といっても「ほったらかし」とはまったく違います。後ろからしつかりと見守っています。そして、手助けが必要なときには手を差し伸べ、子どもが道に外れそうになったときには注意します。ときには厳しく叱ることも必要です。

しかし、叱ることは簡単ですが、叱ってばかりでは逆効果です。かえって子どもの元気やヤル気を削ぐそぐことにもなりかねません。そこで、我が会が勧めているのが「褒め育て」です。よいところを探して褒める、成功した結果よりも努力したことを褒めるのです。たとえ成功しなくても努力し続けるかぎり成長し続けるからです。褒められることで、子どもの心には自信と勇気が湧いてきます。究極の教育とは、ヤル気スイッチを押してやることと、自分で考えさせることだといってもよいでしょう。

本来、子どもは未熟なものです。知識も経験も乏しく、倫理的にもまだ人としてあるべき姿になっていません。そんな子どもに対する最良の教育は、大人がよい手本を示すことです。子どもは親の言うことはきかなくても、親のするようにするものだからです。親の言葉より、親の背中の方が説得力があるということです。まさに「子供の善導は親の倫理実践から」です。

このことは、親子の場合にかぎりません。すべての教育に通じる原理です。先生や先輩、上司などがよい手本を示せば、生徒も後輩も部下も感化されて見習うでしょう。これが我が会という「感応教育」です。教育学者の齋藤孝さいとうたかしさんが「教育という営みは『憧れの伝染』である」と言っているのもこのことです。では、どうすれば人の手本になれるのか、です。人を教育する立場にある人は、常に自ら学び続けることが大前提です。なぜなら、学ぶ手本を示してこそ、学ぶ意欲を引き出せるからです。同じようにスポーツ界には、監督やコーチなど指導者を戒める「人は学ぶことをやめたとき、教える資格を失う」という言葉があるそうです。

この理屈でいえば、子どもに「勉強しなさい」と説教するなら、自分も親として学び続けなければならぬということになります。「ルールを守りなさい」と諭すなら、自分も社会規範を守らなければなりません。後輩に「創意工夫が大切だ」と言っているあなた自身が、前例に囚われすぎてはいないでしょうか。人を諭す言葉は、結局、ブーメランのように自分に返ってくるのです。

最後に忘れてはならないことがあります。しつけや教育の根幹に不可欠なもの、それは愛です。愛に欠けた教育など、共感をもって受け入れられることはありません。ただ、注意すべきは身勝手に盲目的な愛情の押し付けです。それはマイナスの効果しかありません。しつけや教育には、自制的で調和のとれた愛情、すなわち愛和の心が大切なのです。

皆さんには、親として祖父母として、しつけや教育のプロフェッショナルになってほしいし、会友として、倫理教育のプロになっていただきたいのです。倫理の実践者であると同時に、人に倫理を教え、広めるプロになっていただきたいのです。